

苅部 直 教授
Tadashi KARUBE

研究分野：日本政治思想史

研究内容：遠い過去から現在にまでわたる、「日本」に住んでいた人々が「政治」について考え、論じてきたあとを検証し、その意味を探る。

2006年 東京大学教授 大学院法学政治学研究科・法学部に昇任、
現在に至る

日本人の死生観をめぐって

I 「死生観」という言葉

日本語では「生死」「死生」両方の言葉が使われるが、それをめぐる考え方を指すときには「死生観」としか言わない。英語にlife and deathという慣用表現があるのと対照的である。「死生」の言葉は中国古典の『詩経』『論語』に由来する。どちらも、自分が生きる運命の自覚を語った言葉である。死に連なってゆく過程のなかにあるものとして、生をとらえるという思考方法が、「死生観」という表現を選ばせている。

II 『古事記』における生と死

『古事記』に見える世界観は、物を生む一種のエネルギーとしての「むすび」の神の働きによって、万物が生成してきたというものである。しかし、日本の国土の生成の過程を詳しく語るのに対して、動植物と人間の発生には関心を示さない。これとは反対に、人間の死と世代交代については、「黄泉国」の物語との関連で語られるこ

とになる。江戸時代に本居宣長は、このことについて、死後は穢れた世界へ移住するのであり、そのことはただ悲しむしかないという人生観があると指摘した。

III 過程としての生命

本居宣長の国学思想の継承者を自称した平田篤胤は、死後の魂のゆくえについて、師とは異なる見解をとった。篤胤によれば、生者には見えない「幽冥」の世界に死者は生き、生者から祀られることを通じて、身体の死のあとといわば人生を継続させている。こうした見解は、日本の民間信仰における、生と死を一つの過程のうちにとらえる考え方と共通していると言えるだろう。近年、アメリカにおける妊娠中絶をめぐる論争の解決のヒントとして、流動的な生死のとらえ方を評価する見解もある。しかし、個としての「いのち」の尊厳を重視する立場とどう整合させるべきか、議論すべき課題は多く残されている。